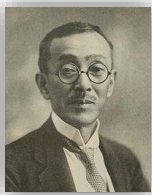


九州大学農学部作物学研究分野の沿革（1920 年設置）

作物学研究分野は、1920（大正 9）年 8 月に九州帝国大学農学部にて 5 つの講座が設置され、農学第二講座として農学部の黎明期にスタートした。その後、作物学講座、作物学研究分野として、現在に至るまで、主に作物学総論および作物学各論を担当してきた。

初代教授 加藤茂苞

KATO Shigemoto（1921 年 2 月～1928 年 3 月）



加藤茂苞は、農商務省農事試験場陸羽支場長を経て初代教授に就任した。彼は、水稻品種改良の研究の先駆者として知られ、イネの類縁関係において優れた業績を挙げた。1921（大正 10）年から 1923 年まで附属農場長、1924 年から 1926 年まで農学部長を兼務し、創設時代の農学部の整備に大いに尽力した。1926 年から朝鮮総督府勸業模範農場長を兼務し、多方面にわたって活動を続けた。

第 2 代教授 高山卓爾

KOYAMA Takuji（1928 年 5 月～1933 年 6 月）



高山卓爾は、農商務省技師を経て、助教授として 1923（大正 12）年 9 月に着任した。作物学の他に熱帯農業への造詣も深かった。また、作物根群の発達と各種土壌環境との関係に関する研究で優れた業績を挙げた。1928（昭和 3）年から教授となり、1930 年から 2 期にわたり附属農場長を兼務し整備に尽力したが、1933 年 6 月に 44 歳の若さで脳溢血のために急逝した。高山教授の逝去後、1933 年から 38 年まで、専任教授空席の期間があった。このため、1934 年 10 月から 1936 年 4 月まで、京都帝国大学教授であった榎本中衛が当研究室の教授を兼任し、オオムギの感温性や感光性、イネの耐冷性等で業績を挙げた。農学第一講座（現・植物育種学研究分野）助教授の小坂博は、1926 年から農学第二講座の助教授として作物の色素に関する研究を行い、1935 年に盛岡高等農林学校の教授として異動した。

第 3 代教授 片山佃

KATAYAMA Tsukuda（1939 年 3 月～1963 年 3 月）



片山佃は、1936（昭和 11）年 4 月に、農林省農事試験場鴻巣試験地から助教授として着任した。彼は、イネ科作物における形態学的研究、特に分けつの秩序に関する研究を行い、1939（昭和 14）年 3 月に教授に昇任した。1943 年 12 月から 1944 年 7 月まで、南方軍総監部付も兼務し、南方地域の農業を指導した。ムギ類の分けつに関する功績が認められ、1947 年度日本農学賞を受賞した。同年に、九州作物談話

会（現・日本作物学会九州支部）を結成し支部長として活躍した。その間、1940年から43年まで助手として務めた藤井義典は、後に佐賀大学農学部教授となった。1944年、江原薫は長野県技師を経て農学第二講座に助教授として就任し、アカクローバーの受精におけるハチの寄与、また飼料作物における品質に及ぼす温度の影響について研究し、1959年6月に栽培学教室（現・植物生産生理学分野）教授に異動した。1959年12月、島野至は農業技術研究所から助教授として着任し、ラッカセイの子実生産に関する研究を行った。彼は、1987年8月に講座外教授に昇任し、1989年3月に定年退官した。

第4代教授 伊藤健次

ITO Kenji (1965年4月～1975年4月)



伊藤健次は、1965（昭和40）年4月に農林省四国農業試験場から教授として着任し、雑草の発芽や成長特性、作物の種子脱落性に関する研究、西南暖地の稚苗技術等に関する研究を行った。また、この時期に島野助教授の他、1963年4月に井之上準、1970年4月に村木清がそれぞれ助手として着任した。井之上助手は1975年10月に創設された熱帯農学研究センターの助教授に、村木助手は1972年4月に福岡教育大学の講師にそれぞれ異動（その後、教授に昇任）した。

第5代教授 松本重男

MATSUMOTO Shigeo (1976年5月～1989年3月)



松本重男は、1976（昭和51）年5月に農林省東北農業試験場から教授として着任し、ダイズの新品種育成を目標とし、肥料応答性・耐湿性に関する研究を行った。古屋忠彦は、1972年11月に附属農場から助手として異動し、ダイズの成熟整合性に関する研究を行った。寺尾寛行は、1978年8月に助手として採用され、水稻の中胚軸伸長に関する研究を行い、1988年5月に附属農場の助手に異動（その後、宮崎大学准教授に昇任）した。

第6代教授 井之上準

INOUE Jun (1989年11月～1998年3月)



井之上準は、1963（昭和38）年4月に助手として着任後、1975年10月に新設の熱帯農学研究センター助教授、1988年11月に教授に昇任し、1989（平成元）年11月に農学第二講座教授に異動した。彼は、主にイネ科作物の出芽力およびアジア稲やアフリカ稲の浮稲性に関する研究で多くの業績を残し、1986年に日本熱帯農業学会賞が授与された。定年退官後は、福岡女子短期大学学長、常務理事を歴任した。吉

田智彦は、1990年10月に福岡県農業総合試験場から助教授として着任し、作物の成

長生理、作物育種学に関する研究で多くの業績を挙げた。古屋忠彦助手は、1992年10月に留学生担当講師となり、農学部留学生の指導に尽力し、2007年3月に定年退職した。鄭紹輝は、1993年4月に新たに助手に採用され、ダイズの栽培生理に関して優れた業績を挙げ、2004年7月に佐賀大学助教授に異動（その後、教授に昇任）した。

第7代教授 福山正隆 FUKUYAMA Masataka (1999年2月～2004年3月)



福山正隆は、農林水産省草地試験場部長を経て、1997（平成9）年8月に附属農場教授として着任し、1999（平成11）年2月に作物学分野教授に異動した。また附属農場長を2期務めた。彼は、牧草や作物のバイオマス生産に及ぼす光合成能力について優れた業績を挙げ、「短草型草地の特性の解明と生産力の評価に関する研究」で1989年度に日本草地学会から学会賞を受賞した。さらに、編著者として発刊した『緑地環境学』（文永堂出版、2001年）が認められ、2002年に農業土木学会賞を受賞した。九大を定年退官後は東京農大教授として赴任した。吉田智彦助教授は、2001年4月に宇都宮大学教授に異動した。

第8代教授 井上真理 IWAYA-INOUE Mari (2004年9月～2017年3月)



井上真理は、教養部生物学教室助手・助教授を経て、2001（平成13）年11月、園芸学分野助教授より作物学分野助教授に異動し、2004（平成16）年9月、女性初の農学研究院教授となった。その後、副研究院長、九州大学副理事を務め、学生教育や男女共同参画推進にも尽力した。井上は、植物の環境ストレス適応について、水分生理学的・形態学的視点に立ち、平成26年度低温生物工学会賞を受賞した。また、日本作物学会および低温生物工学会等の学会誌編集委員長、評議員、総務担当理事、学会長などを歴任している。2005年4月、東京大学大学院総合文化研究科助手であった湯浅高志が助教授として加わり、主に作物の環境応答シグナル伝達に関する研究を行い、2013年4月に宮崎大学教授として異動した。2014年3月に、石橋勇志が准教授として着任し作物の収量・品質向上を目指した作物学に立脚した分子生物学的研究を行なっている。2016年6月には、濱岡範光が助教として着任し作物学研究に加わった。

作物学研究分野の発展は、教官（教員）・事務職員および学生達（留学生：中国・韓国・ベトナム・インドネシア・バングラデシュ・ミャンマー・ブラジル）の協力により達成されたものである。1920年8月の設立から2017年3月までに、392名が卒業・修了し、国内外の大学・研究機関、国家・地方行政、種苗会社、食品会社、商社等さまざまな分野で活躍している。

2017年3月31日現在